

〇〇してみました世界のフィールド

第二の家族 ウィン一家

ふかがわ ひろき
 深川 宏樹
 日本学術振興会特別研究員PD (京都大学)



克蘭の一員になってみました
 有袋類の毛皮で作られた伝統的な帽子をかぶった著者

パプアニューギニアで長期調査を始めたころ、身ひとつで飛び込んだわたしを温かく受け入れてくれる克蘭（氏族）に出会った。彼らとともに過ごした濃密な二年間は今でも心の糧となっている。

出会いは偶然

「じゃあ、家に来てみないか？ 一年でも二年でも居たらいい」。バス停で会った四〇代の男性ウィンは、こどもなげに、そう言った。わたしは、まだまだ一言一言しか、ことばを交わしていなかったように思う。当時、わたしはニューギニア高地エンガ州で長期調査をおこなう村落を探していた。わたしを含め、人類学者はある奇妙な信仰をもっている。例えばニューギニア高地のように、人類学のフィールドとなるような地域、なかでも「田舎」では、身ひとつで飛び込める、なんとか人びとに受け入れられ、長期のフィールドワークをおこなうことができる、というものだ。根底の部分における、人間への信頼とでもいえるだろうか。わたしもそうした期待をもって、エンガ州に身ひとつで飛び込み、たまたまバス停で一緒になった男と、そしてその家族たちと、二年近くわたって濃密な日々を過ごすことになった。その出会いは偶然だったが、ともに暮らした日々は、今でもわたしの人生の最良の部分となっている。



ニューギニア高地エンガ州の村落風景

克蘭の一員になる？

先ほど「家族」と書いたが、これは正確な表現ではない。確かにわたしはウィンの家族（ウィンとその妻の三〇代女性サローン、その五歳の息子と三歳の娘にわえて、六〇代に達するウィンの父母）と暮らしたのだが、そもそもわたしが住んだM村の村人たちは、皆がウィンの親族であった。エンガ州の人びとは、人類学で父系克蘭（氏族）とよばれる親族集団のまとまりのなかで暮らす。克蘭を単位として村落が形成され、土地が所有される。その土地で、人びとは畑を耕し、サツマイモやバナナ、サ

パプアニューギニア
 エンガ州



「ヤカエマデン・ヒロキー」

そんなわたしでも唯一、克蘭の人びとの生活に貢献できるものがあつた。それは男女の結婚に際して夫方から妻方に贈られる婚資への現金の供出である。といっても貧乏学生であつたわたしはさほどの貢献はできなかったが、それでもヤカエマデン・克蘭の男性が婚資を支払う際には、必ずその場に赴いて現金を供出した。婚資に現金を供出した者は誰でも、妻方からお返しに貰える豚肉の分配にあずかれる。豚肉の分配は、村落の広場でおこなわれ、分配者は広場の中央に立つて、豚肉を頭上にかかげ、大勢の人びとの前で婚資に現金を供出した者の名前を二人ずつ呼び上げてゆく。わたしも毎回「ヤカエマデン・ヒロキー！ ヒロキー！ ヒロキー」と呼ばれる度に、豚肉を受けとりに小走りで行く。ある日はわたしの走り方が滑稽だったからか、わたしに豚肉が分配されるときには、いつも笑いが巻き起こった。



夫方から妻方に婚資の豚を贈る場面



家屋の柱を作るために集まった男性たち



克蘭の土地に作られたサツマイモ畑

トウキビを植え、豚を育てて、家を建てる。M村はヤカエマデン・克蘭（人口三〇〇人程）の居住村であり、M村で暮らすこととは、すなわち、そのヤカエマデン・克蘭の一員として暮らすことだったのだ。

具体的には、誰かが家屋を建てるのであれば森から木材を切り出して提供し、畑を共同で開墾し、自分の豚を屠っては仲間たちにふるまい、他の克蘭の男性らとの喧嘩ともなれば加勢し……といった勇ましい話はない。貧弱なわたしは、ぬかるんだ泥道に足をとられては肩を貸してもらい、サツマイモ畑の耕し方から薪の運び方まで一から教えてもらう毎日だった。自分でもとんだお荷物だったと思うが、彼らはそれでもわたしを温かく迎え入れ、「お前はヤカエマデン（の一員）だ。他克蘭の奴らから『お前はどい

から来たんだ？』と尋ねられたら、『日本出身だ』と言え！』といつも笑いながら声をかけてくれた。そんな笑いに包まれながら、毎日一緒に食事をし、現地語を学び、野良仕事についてまわり、村の話し合いに参加する、といった生活を続けていくなかで、多少なりともわたしは克蘭の一員らしくなっていた。と、願いたい。

わたしは彼らのことばに甘えて「現地の人のようになれた」と無邪気に主張するつもりはないし、彼らと真にわかり合えたといえるほどに楽観主義者でもない。だが、わたしのような者でも温かく受け入れる懐の深さが彼らの克蘭にはあつた。それだけは確かなことである。